

中川李枝子（なかがわりえこ）

1935年、北海道札幌生まれ。光村図書小学校「国語」編集委員。保育園に勤めた後、童話作家として多くの子どもの心を魅了する作品を執筆し続ける。主な作品に、「くりとくら」「かえるのエルタ」「ももいろのきりん」（以上、福音館書店）などがある。

「はる」は、光村図書のホームページ「光村チャンネル」でお聴きいただくことができます。

<http://mitsumura-tosho.co.jp/skyokasho/top.html>



人と出会う、本と出会う

とびきり楽しい 一年生の始まり

作家 なかがわりえこ 中川 李枝子



17年度版「こくこ」—上「はる」

一年生になったら朝寝坊はしてられない。学校へ行こう！と飛び起きる。今日はどんな勉強をするのだろう。教室でおもしろい事件が起きるかもしれない。そしたら先生は怒るかな、笑うかな——早く先生の顔を見たい。

学校へ行ったら真つ先に大きい声で、「先生、おはようございます。」ってあいさつしよう。先生も必ず、「おはよう、〇〇さん。」って言うってくれる。先生はクラスの子の名前を全部覚えていて決して間違わないから偉い。

もし、タンコブや引っかき傷があると、先生はすぐ見つけて、「どうしたの。」って聞く。授業中、こそこそおしゃべりしているとギョロリとにらむ。先生は目もいし耳もいし。

入学式から始まって一年生の一学期というのは、毎日、何かしら新しい体験が待ち受けている。一年生は世間知らずならぬ学校知らずなので、そのたび、びっくりしたり感心したり興奮もする。

家にいたのでは想像もつかない楽しみが学校にはいっぱいある。さあ、学校へ行こう！たとえ臆病で人見知りが強くても一年生は好奇心のかたまりだ。先生の笑顔が待っていると思えば勇気が湧く。友だちにはいろいろいて、気の合うのもいれば合わないものもあるけれど、でもみな新しい仲間だ。

おはよう！の一声で、きつとお互いが好きになる。

六十年前はわたしも一年生だった。一年生になった気分は、昔の子も今の子ども変わらないだろう。学校に行きたくない子どもなどいるはずはない。

わたしが願うのはただただ、どんな子ども、学校へ行こう！と目を輝かせて登校することに尽きる。そして学校には、子どもたちの気持ちをそっくり受け入れる責任がある。

すべての一年生が、先生大好き 友だち大好き 学校大好きで、そのままずっと六年間を過ごしてほしい。

さて何事も初めの一步は大切、入門期は慎重に案を練る。練って練って練り上げる。教科書の向こうにかわいい一年生が待っていると思えばこそだ。

「はるの はな／さいた／あさの ひかり／きらきら／おはよう／おはよう／みんな ともち／いちねんせい」

先生といっしょに楽しんでくれたらわたしは本当にうれしい。そして歌ってほしい。斎藤ネコさんのこの軽快なメロディは一年生にぴったり。いっぺんで覚えるだろう。大人になっても決して忘れないと思う。

わたしは、知らない町を歩いていても小学校を見つれると思わず近寄り、フェンス越しに眺める。真つ先に目に入るのは花壇。日当たりのよい場所に四季折々の花がたつぷり咲く。校庭には樹木も多い。入学式のころ、我が家の辺りは桜だが、日本各地では、どんな花が咲くのだろうか。

はる

詩／中川李枝子
作・編曲／斎藤ネコ